

# 縁談のテーブル

第4回



大石将弘



宮部純子さん  
女優。大阪府出身。五反田田所所。映画『橋道世之介』『nico』など舞台以外でも活躍。  
お相手

ともに関西出身、上京して、わりと近い時期に宮部さんと僕はそれぞれ五反田とままごとに入団していったんです。宮部さんは今京都で生活しながら、初めて自分でお芝居をつくって、9月にはワークショップも企画しているそう。どうして京都に戻ってきたんだろう、自分でつくりたいと思ったんだろう。気になって今回お話を聞いてみることにしました。

## 「待つだけのブス」にはなりたくない

宮部 東京来て4年経つけど、もう4年ってあたりは思ってた。映画も出させてもらって演劇以外の仕事も

あったりするけど、結局さ、待つだけやん俳優って。待つのが仕事とかいうやん……しょうもないなって。他力本願なところが俳優という職業にありますよね。

大石 どうしてもね。

宮部 でもさ、そこまで求められるほどの才能とか容姿とか備えてないから、それですつと待つてないかんとかいうのが……あほみたい(笑)。大石 僕も自分で何にもできないのが嫌というか。台本書いてくれる人がいて、舞台をお膳立てしてもらえないと何もできないっていうのが。

宮部 やからゼロからつくってみようと思った。待つだけのブスにはなりたくない。

大石 ブス俳優にはなりたくない。宮部 だって待つてたつてなんもこーへんやんって思うのよ。待つてだけの人を見ると。同じような芝居できる役者さんはほかにもいるし。そんなんと争っての意味は、ないよ？って思ってた。それよりも一緒になんかやる方が、争うよりもつくるっていうことの方が、面白いのかもしれないなって。

## 東京と京都／仕事と生活

大石 京都でやろうと思ったのは？

宮部 今回上演する菅野アタリが安く借りられるっていうこと、京都に自分が今戻ってるっていうタイミングと。東京でやんの恐くない!?

大石 恐いかも。これ(自主企画の公演)が終わったらまた東京に戻るの？

宮部 五反田団の公演を7月末にやって、それを京都でもやんねんけど、それが終わったらまた京都に居残り。

大石 東京にも家があるの？

宮部 うち母親が家一人つきりつていうのもあるし、自分も東京おつたら一人やから、なんかこの生活ってさ、意味なくない？と思って。お芝居の仕事がないんやったら帰ろうと思ってる。

大石 じゃ生活の拠点をこっち(京都)にしようって。

宮部 生活はこっちでしてたくて。仕事は東京。

大石 こっちにいる空いた時間でワークショップをやるって。

宮部 そそ。

大石 いいですね。僕も6・7月に東京での予定がほとんどないから家を引き払ったんですよ。家賃を払い続けてると東京にいちやうじやない。それが重力になってるのがあんまり、良くないなって思ってる。東京にいる必然性をなくしたら、実家に帰ることも含めてどこに行くにも軽くなるから。

\*対談の時はままごとHPで読めます!

# ままごと新聞

newspaper of mamagoto

第10号

発行日：2014年7月12日  
発行元：ままごと

「ままごとの新聞」は、柴幸男の作品を上演する団体「ままごと」が不定期に発行する活動報告紙です。

## 今

9 年5月、僕は自分の戯曲9作品をままごとのホームページ上にて無料公開しました。今回は戯曲公開までに僕なりに考えた劇作家と戯曲について書いてみたいと思います。

まず考えたのは、劇作家でありたい、ということ。個人的な欲求です。僕は劇作と演出を兼ねて演劇をつくることが多いのですが、ここ数年、演出の比重が大きくなり、そのことに危機意識を持っていました。活動の幅も、個人の中での力関係も、なぜ危機を感じたのかは分かりません。だけど素直に劇作家でありたいと思いました。劇作家の条件とは何か。まず良い戯曲を書くこと、そしてその戯曲が上演されること、そう考えました。

さて戯曲とは何でしょうか。まず前提として戯曲はものすごく読みづらい「読み物」だと僕は

は思います。漫画のように日本人の心と戯曲を楽しく読める姿は想像できません。なぜ読みづらいのかには今は触れないでおきます。もちろん戯曲には芝居の設計図という役割もあり

ます。非常に読みづらい読み物であると同時に、芝居を生み出す力も持つ不思議な文字表現、それが戯曲だと僕は考えます。

さて、僕は日本語のヒップホップが好きで趣味でよく聴きます。ヒップホップの世界では数年前から、フルアルバムに相当する楽曲集を無料でネット配信する活動が出てきました。この発表方法は「ミックステープ」と呼ばれたりしています。実際はデータなのでテープでもなんでもないので、かかつてカセットテープで作品を発表した名残です。無名のアーティストが名を売るための行為でしたが、新作をフリーで配信する著名アーティスト

## なぜ柴幸男は戯曲を無料公開したのか

トも出現しました。この「ミックステープ」の文化が今回の戯曲公開に影響を与えていることは間違いありません。

そんな無料配信の音楽、ブログをまとめた本、著作権が消滅した文学を集めた青空文庫など、無料公開された作品は僕の生活にも自然に存在するようになりました。それぞれに無料公開の目的があり、また商業的な成否もあるでしょう。そして、僕はふと考えました。戯曲こそ無料公開にふさわしいのではないかと。

音楽、小説という複製が可能な作品が無料公開を恐れたり、その意味や効果が議論になるのは当然だと思います。しかし戯曲という、その読みづらさゆえに不完全とも言える文学が公開を恐れる必要があるのだろうか。もしかしたら一回でも上演機会が増えるほうが戯曲や劇作家に



劇作家大会が行われた城崎温泉

## ままごと News

ここでは、最近起こったままごとにかんするさまざまなニュースをご紹介します。



### ■戯曲公開プロジェクトが始動

冒頭の柴コラムでも言及された通り、柴幸男の戯曲を無料公開するプロジェクトがスタートしました。現在公開されているのは、『妥協点P』『日本の大人』『つくりばなし』『わが星』『少年B』『あゆみ(長編)』『あゆみ(短編)』『ハイパーリンくん』『反復かつ連続』の9作品。詳細は劇団HP (<http://www.mamagoto.org/>) を参照。



昨年の小豆島 春のおさんぽ公演より 撮影＝濱田英明

### ■小豆島にふたたび

昨年、瀬戸内国際芸術祭の一環として、小豆島で滞り制作を行ったままごとが、今年は7月と9月に、「アート小豆島・豊島2014」に参加。小豆島ならではの企画で、島民や観光客の方々を巻き込みながら島をめぐる。

# 「青年座のあゆみ」

尾身美詞

私も柴さん作品の大ファンの一人です。

「生きていく」ということか「地球とか人間とか宇宙とか時間とか思い出とか。なんだか言葉にすると大きすぎるけど、いつもは気にしたり、感じたりしないけど。確実に私たちの周りにあるもの。こと。そんな大きな存在を肌で感じ、生きてるって素晴らしい。って。なんだか心で感じてしまう。そんな舞台ならではの魔法をかけてくれる柴作品。こんな素敵な舞台を青年座の役者で観てみたい。きつともっと壮大で面白くなるに違いない！ そんなことを、ずっと考えていました。そしてこの夏、その奇跡が形になるうとしていきます。

今年で創立60周年を迎える青年座が記念公演のレパトリーとして『Ac3D』役者企画夏の味宴』と題して3名の作・演出家をお迎えして3本の作品を上演することになり、Ac3Dとして『あゆみ』が上演されることになったのです。幅広い年齢層の役者がいる新劇の劇団で、20〜70代まで女優10名とこれまでの『あゆみ』では出演していない男性キャスト3名を投入し、13名の個性豊かな俳優で贈る青年座の『あゆみ』。青年座の60年の歩みも感じられる、新しい『あゆみ』が誕生しようとしていきます。

芝居はままごとなんだ!! 稽古場はにぎやかで笑い声が絶えませうとしていきます。

わたしがずっと観てみたいと願っていた舞台。それは、わたしの予想を遥かに超えたものになりつつあります。

稽古を観ながら、何度もぐつときて、涙が流れました。そこに、私の大好きな柴さんの作品がありました。皆があゆみを生き、歩んでいる。60年の歴史の詰め込まれた劇場で……。この夏の『柴幸男×青年座』という奇跡を、ぜひ目撃してください。

かがまた新しい考えを持つことが大きな目的です。兵庫県豊岡市で開催されている「劇作家大会」の最中にこの文章を書いたことに、少しだけ意義を感じて終わりにしたいと思います。

82年愛知県出身。青年団演出部所属。日本大学芸術学部在学中に『ドミノ』で第2回仙台劇のまち戯曲賞を受賞。2010年『わが星』にて第54回岸田國士戯曲賞を受賞、同年に劇団「ままごと」を旗揚げ。



Yukio Shiba

\*参考資料  
<http://internet.watch.impress.co.jp/cda/news/2006/11/08/13870.html>  
<http://tpro.nikkeibp.co.jp/article/OPINION/20061113/253441/>



会場の城崎国際アートセンター



大会入り口、戯曲の販売などが行われていた



豊岡市にある芝居小屋での上演直前

とってプラスになるのではない。もちろん成功する公演も失敗する公演もある。しかし戯曲は本来、単体で存在できる作品。ならば公演ごとの成功と、戯曲本来の価値は無関係とも言えるのではないか。逆に言えば、戯曲を一読してもその上演の成功をはかることは出来ない。とすれば過去だけでなく、現在公演中の、これから公演する戯曲でさえも、一般に公開することはならぬマイナスではなくむしろさまざまなプラスの効果を生むのではないか。そう、僕は考えをみました。

などいろいろと書いてみたのですが残念ながら収まりませんでした。ただ一つ言えることは、生まれては消えるという宿命を背負った演劇の中で唯一、場所と時間を超えることができるのが「戯曲」だと僕は考えています。そして、その戯曲を生み出すことができるのは劇作家だけだと思っております。

未来の戯曲と劇作家に対しての小さな実験、それが今回の戯曲公開です。当たり前ですが誰もが戯曲を公開するべきだとは思いません。誰かに賛同してほしいわけでもありません。僕の中にある考えをまとめること、そしてその考えに触発されて誰

## 「ハートのユート」。

vol.07



宮永琢生

【制作】

久しぶりのこのコーナー。みなさんお元気でしたでしょうか。今日はどしゃ降り。雨の日は、音楽が憂鬱な気分を優しく包み込んでくれますよ。おすすすめ。

さて本日は青年座の『あゆみ』の稽古場におじゃましております。今回、青年座の皆さんにお声掛けいただき、東京では約3年ぶりの『あゆみ』の上演です。『あゆみ』が生まれたのは2008年。『あゆみ』の、はじめのうちは、20分の短編作品でした。その後、畑澤聖悟さん(渡辺源四郎商店)が青森県立弘前中央高校演劇部で上演してくれたのをきっかけに、これまで100人以上の高校生が『あゆみ』を演じてくれました。こんなに多くの『あゆみ』が生まれるなんて、たぶんつくった柴本人も思っていないのではないでしょうか。彼女たちはどれだけの道を歩いたのでしょうか。思えば遠くに来たものです。ほんと。

拝啓 あゆみさん、お元気ですか? 3年前に新潟で別れて以来です。あの後も全国の高校生たちと一緒に作品をつくっていると聞きました。相変わらずお元気なんでしょうか。僕らも今、高校生と一緒に『わたし』という作品をつくっています。またばくらにとって大切な作品ができると感じています。今度あなたに会えるのは7月ですね。本番でまた新しいあなたに出会えるのを楽しみにしています。あ、さささ。かつてあなたを演じた俳優のみんなは、家族を持ったり、子どもが出来たり、まるであの時のあなたのようにです。まだ高校生だった彼女たちは、大学生になって新しい未来を馳せたり、就職して社会の厳しさに落ち込んでいたり、それぞれの、はじめのうちは、を歩き出しています。みんな、あなたに会いたかったと思いますよ。彼女たちにも連絡してみますね。ではまた劇場で。 敬具



堀江由衣 『The World's End』

声優界の永遠のアイドル「ほっちゃん」こと堀江由衣さんの17枚目のシングル。自身がヒロイン役を務めるTVアニメ「ゴールデンタイム」のオープニング&エンディング曲を収

## 「わが星」のこと

第1回



端田新菜

【俳優】

えっと、今回から「わが星のこと」という連載を開始します。よろしくお祈りします。

今日は、今年3月にいわき・Piafesでやった「わが星夜話」の話です。

『わが星夜話』は、2011年6月に行われた「いわきのわが星」のことを振り返るという企画でした。□□□ウチコロ、がライブして、Xのむさん、野村政之、Xコーシ君、三浦康嗣、Xシゲさん、(村田)シゲ、今尾さん(今尾博之、でトークして、柴君からのお手紙を読んで、最後に「いつかどこかでいっしょにver.」を3年前の『いわきのわが星』のおかげで出会った元・高校生や今回の企画者である前田さん(前田優子)も交えてみんなで歌いました。前田さんも今尾さんのむさんも元・高

校生の皆も私も、それぞれこの3年の思いをラップしました。

「わが星」がいわきに行った2011年の6月のこと。そこから続く今日のこと、未来のこと。音楽の力に助けられて、言葉にならないうらな想いの中から、を、見つめる。見つめる作業が、ほんの少しできたように思います。



2014年3月22日ライブの後の撮影=山川哲夫

今夜、一緒にいてくれてありがとう本当に、ありがとうございます。勿来、いわき、小名浜、光洋、桜ヶ丘、平、いわね、Congratulation! いろいろなお祈りください。お祈りください。全部、お祈りください。会いに来るしかできないごめん。えんえん話してください今夜 Our Planet in Lastanza!!

企画してくれた前田さん、会場提供してくださったLa Stanzaさん。そして3年前の2011年の6月に、いわきに私たちを呼ぶと決めてくれたいしいみち子さん。ありがとうございました!! ラブ!!

## 「長者町からの手紙」

1通目



加藤伸葉

【制作】

お元気ですか、いかがお過ごしでしょうか? はじめまして! わたくし加藤伸葉と申します。今年からままごとの劇団員になります。そこで、えと、このスペースもいただくことになりました。緊張を隠せませんが、あれこれ書いていきますのでどうぞよろしくお祈りします。

まずは自己紹介から書いてみます。わたくし生まれも育ちも名古屋で、今も元気に名古屋で暮らして続いております。そんなわたしがままごとにかかわるようになったきっかけは、2010年に名古屋で滞在制作された『あゆみ』でした。当時普通に会社勤めをしていたわたしがひょんなことから制作助手としてかわることになったこの『あゆみ』は、あいちトリエンナーレ2010の公募枠にて上演されたち大阪・岐阜でまた再演として東京・横浜・福岡・香川・新潟とさまざまなまちで上演していただきました。

そのきっかけにもなったあいちトリエンナーレは2010年に愛知で始まった国際芸術祭で、美術館や劇場以外にも、長者町という所をまたなか会場としていま古屋の中心部にある、古くからの織機問屋が軒を連ねる商売のまち。そんな堅いイメージがあるにもかかわらず豊かに広が



長者町にかかる印象的なゲート。カッコイイ